

✿ ベトナム・ドンラム村集落保存計画

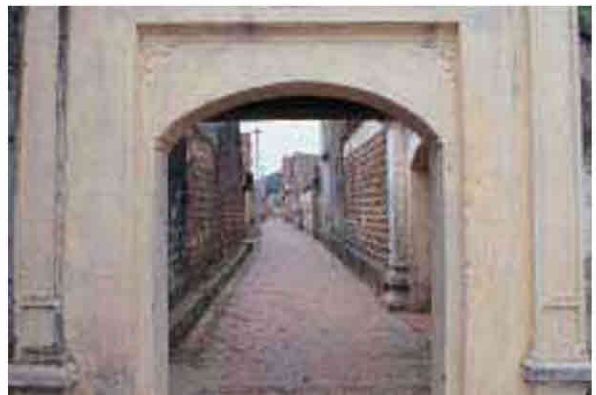
建造物研究室では、今年度より3年間の計画で、文化庁による国際協力事業への協力及び昭和女子大学との共同研究として、ベトナム北部の集落保存計画策定調査をおこなっています。でも、なぜ奈文研がベトナムなのでしょう。

奈文研では、日本各地の歴史的町並みの調査を昭和40年代から続けており、近年でも高山市、楯川村と、継続的に調査をおこなっています。ベトナムの集落保存計画調査は、この日本での蓄積を活かす格好の機会となります。我々が調査・研究の対象としているドンラム村モンフー集落は、首都ハノイの近郊、ハタイ省の一集落で、伝統的な集落形態を完全に残した、貴重な存在です。集落内の建物はどれも似た造りで、手探りでわずかな違いを探していくこととなりますが、ベトナムには民家についての体系的な研究が存在しないため、この調査には、対象に正面からぶつかって民家史と集落・都市史を一から立ち上げていくような開拓感があります。

それだけではありません。ベトナムの民家は、東アジア木造建築の本質的な意味について考えさせてくれるものでもあるのです。ベトナムの民家は、梁の組み方に独自の形式を持ちながらも、その基本は中国建築と共通しています。モンフー集落内に現在残っている民家はほとんどが19世紀以降に建てられた比較的新し

いものですが、その形式の素朴さゆえにむしろ古い中国建築の姿を伝えているように思わせるものがあります。その建築は、例えば入母屋屋根を持つ建物の場合、日本では隅の間を正方形にするのが一般的であるのに対し、桁行と梁間を違えたまま組み上げたりしています。このような違いをまのあたりにすると、屋根形式と構造との関係について抱いている常識に再考を迫るような、言いしれぬ力強さを感じさせられます。

こうした考察は、われわれが日本の古代建築について研究する際の姿勢と似ています。古代建築は、建築を成り立たせる個々の基本要素について、根源に立ち返って問い直すことのできる素材だからです。ベトナムの民家、集落の調査は、そんな、奈文研が果たすべき建築史研究への貢献の延長上にあるものだと考えています。
(文化遺産研究部 清水重敦)



ドンラム村モンフー集落の路地